



非文字資料についてのあれこれ



的場 昭弘 (非文字資料研究センター 研究員)

2007年に在外研究の機会を得て、フランス南部の都市リヨンに一年滞在することになった。海外生活は何度目かだが、ひさびさの一人での生活。しかもこれまで住んだこともない地での生活は、年齢からいってもいささか困難を伴うものであったことは確かだ。

ある種亡命生活のような状態。そうした状態に自分を追い込むことは、リスクもあるが、スリルもある。まったく人間関係のない外国の土地で、誰とも触れ合うことなく過ごす一年。これは思考を研ぎ澄ますには絶好の機会、しかし精神的にはタフさが要求される。

この亡命生活のような体験は、COEの理論班が問題にしている文字、言語の問題について興味ある情報を与えてくれた。

ここにパオロ・ヴィルノ『ポストフォーディズムの資本主義』(柱本元彦訳、人文書院、2008年)という書物がある。題名からすると全く非文字資料の研究と無関係な本のように思える。なるほど全体の内容は、以下のごとくで、直接非文字資料の研究とは関係していない。

大変興味ある内容なので紹介してみよう。本書はチョムスキーとフーコーの1971年の対談から始まる。イントローヘンで行った対談である。ここでチョムスキーは普遍言語を振りかざし、歴史なき文化、普遍的文化を強調し、フーコーはむしろ歴史を強調する。チョムスキーはすべての人間には共通の言語体系があり、それゆえ共通の正義があると主張する。しかしフーコーは、人間は歴史に規制された存在だと批判する。二人の対話は平行線をたどる。

そこでヴィルノは、脳研究の現代的成果を盛り込みながらこの議論に新しい光を当てる。つまり「人間的自然」という概念を導入するのだ。わかりにくい概念だが、社会科学と自然科学を結びつける輪、つまり脳にある社会性といった本能によって自然科学と社会科学を結びつけるというのがこの概念導入の趣旨である。

最近の脳研究では意識をかなり細かいレベルで決定できるようになっているという。その結果、心身一元論に

近づいている。しかも、脳研究は意識形成以前、すなわち言語習得以前にある意識の問題をも説明できるところまで来ているらしい。

著者はそれを使いこう語る。たとえば、鏡ニューロン。ブローカー野の45、46番は言語習得前に社会性を有しているという。人間の他者への共感、言語によって生まれるのではなく、言語習得以前にすでに刻印されている。言語習得を通じて形成される意識以前にある意識。その存在は、人間が個人ではなく類として生まれることを意味している。言語はこの類的な社会意識を作るのに働くのではなく、むしろそれを否定し、自我、そして利己心を作り上げてしまうのだという。この言語以前に成立する社会性を問題にすると、社会科学と自然科学とを結びつける共通の場が現れるのだと主張する。

人間の鏡ニューロンが社会性をもつということは、人間は未完成のまま社会性を持っているということでもある。その未完成さが、人間を類たらしめている。たとえばトラは獲物をとるという点で完成度が高い。つまり本能的に獲物をとれる。人間はそうではない。トラのようになるには何年学んでも無理。そこで人間は未完成であるがゆえに別の方法を考える。これを免除の体系といい、それはあることに特化することを免除されていることでもある。この免除のおかげで、人間にはあらゆる世界の潜在的な可能性が開ける。ネオテニー(幼児性、未完成)によって人類は発展できた。しかもそれが社会性を生んだというのだ。

長いこと人間社会は伝統的なくびきの中でこうした幼児性を克服し、専門化を凶ってきた。職人は職人、商人は商人という分業だ。その典型がフォーディズムの時代の資本主義。特定商品を大量生産するため徹底した分業を行った。なるほどある生物が環境に適應するには、ある能力を肥大化させるといい。しかしその反面、この発展が別の環境に移るとマイナスに働く。

著者は亡命者の例をあげる。母国語と母国の文明しか知らない亡命者は異国の地で不安にさいなまれる。まる

で自分が無用の存在であるかのように感じられる。それはある特定の環境にのみ適合できるように特化していたからである。しかしいつか新しい環境に慣れる。それはある特化した能力のレベルが低ければ低いほど早い。つまり若いほど適応性が高い。

さてここからいよいよ本題である。現代の資本主義はこれまでの特定生産物の大量生産ではなく、多品種の少量生産の時代、ポストフォードイズムの時代である。そこで要請されるのは決まった専門能力ではなく、フレキシブルな潜在的能力である。

潜在的能力は未完成であればあるほどいい。ネオテニ一度が高いほどいい。しかし、現代資本主義は今まさにこの人類のネオテニーをむさぼりつつある。人間の中途半端さを逆に搾取に利用しているというわけだ。

それはむき出しの人間という生物的存在への搾取。専門性はある意味では、生物的社会性の対極社会科学的社会性の世界にある。しかし今は社会性そのものが生物的世界に変貌した。つまり、今ではむき出しの生物的存在が搾取される時代になったというのだ。これはイタリアのアントニオ・ネグリが盛んに言っていたバイオ＝ポリティクスの搾取に近いのかもしれない。もっと今の言葉でいえば、何事にも感動しない、無感動で、無関心な人間。一番資本にとって価値ある人間はこうした人間だというわけだ。感動しないだけある側面が秀でていない。制御もしやすい。順応性が高いということは、批判精神も欠如している。流行から流行を追い、どれ一つとして完成することはない。まさに現代社会は浮遊の時代。その浮遊を資本が収奪する時代というわけだ。まるでゾンビのような人間だ。

今の社会は純粋に意識以前の世界、ぶつぶつわけのわからないことを言う行為（言語ではなく、叫び）を利用することで、生産を機能させている。人間の言語がますます儀礼的な世界に留まり、無機物化していくところに資本主義の目標があるとすれば、それは生物としての人間の収奪ということである。

さてこうしたポスト資本主義における新しい動きの根拠となった脳研究の問題は、実は非文字資料研究にとっ



自宅近くからのリヨンの風景

て一考に値するものである。

さて私の今回の一年の滞在とかれこれ30年近く前の滞在を比較するならば、明らかな違いがある。まず歳を取ったことでネオテニ度が低下していること、そして専門能力も発展した結果、免除もなくなり、潜在的可能性が激減していることだ。

文字の世界、つまり言語の世界においてはなるほどこの30年の間、専門能力とフランス語の語彙も増えているが、潜在的可能性というブローカー野の部分ではむしろ減退しているのだ。先に私の一年は一種亡命状態であったと述べたのは、まさにそんなところを語らんがためである。

若い学生が私を遠慮する年齢になったことで、社交を断ち切り、大いに研究に勤しむことができた点で良しとするにしても、根無し草の亡命者のように、浮草の一年を過ごしたともいえる。

その意味で言語、すなわち文字体系を通じた情報はどんどん集まったが、生身の人間との触れ合い、社会性という側面、もっといえば生物的な生の連鎖として情報は増えなかった。かつてミシュレが、温かい暖炉のそばで一人で寂しく過ごすブルジョワと、寒いあばらやで家族に囲まれて過ごす暖かい貧民とを比較したが、まさに私の一年は前者だったのかもしれない。

非文字はまさに、その意味では生物学的な生の情報を持つものかもしれない。実は理論班の成果を取りまとめながら、非文字の概念についてあれやこれや思索をめぐらしたのだが、生物学的な言語以前の社会性の問題については考えがいたらなかった。



もし生物学的な社会性が問題になりうるなら、言語体系として捉えられる情報はすでに言語以前にインプットされている可能性もある。もちろん、これは内容のあるものではなく、儀礼的な言語のような、決まり決まった情報のやり取りにすぎないかもしれない。

とはいえ、それは生きた人間と人間の血の通う情報を運ぶものともいえる。同情や憐憫といった感情が、まさにこのネオテニー状態にあるとすれば、言語体系でもた

らされた情報より勝るものを、それは持っていると言えるからである。

おそらくこうした言語以前の情報体系を知るには、人類の奥底に眠る生物学的な根源を脳研究が調べ尽くすことを待つしかないのだが、その意味でも非文字資料研究にとって最近の脳研究の進歩は見逃すことのできないことであると言えるかもしれない。

調査研究エッセイ

文化大革命の洗礼を受けた人と 文化財の数奇な運命 中国浙江省廿八都調査からの報告

津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）



中国浙江省の西端に、福建省に接し、江西省にも近い廿八都という古くからの宿駅がある。古くは弘法大師が福建省の海岸部福州に着き、福建省内を通過して、この廿八都を経て長安に行ったのだという。そのためか、多種多様な豆腐が廿八都にあることと相あわせり、この町の豆腐を弘法大師が日本に伝えたとの伝承がある。廿八都は、南流する楓溪に沿って南北に細長い街村をなしている。南の福建省側から楓溪を屋根付橋の水安橋で渡ると細長く楓溪村が続き、街並みが少し途切れた先に大きな塊状をなす花橋村と浣里村がある。

ここ廿八都の調査をする機会をえて、2008年8月24日から9月1日にかけて現地調査を行った。その間に気づいた点について以下に報告したい。

廿八都は先にあげた3省に近接して位置している。そのため、各省の異質な文化が融合し、かつ混在しつつ、伝統的文化を濃密に残していることで知られている。廟や民居などの古建築も多く、清初から民国時代の建造物群によって街並みが形成されているといわれている。しかし、古建築の建築年代については必ずしも根拠が明確でない場合が多い。廿八都の古建築について最も詳しい『廿八都鎮誌』⁽¹⁾にも古建築の建築年代を記すものもある

が、その根拠を明記するものはない。それは、建築年代を裏付ける文献資料が極めて少ないことに起因していると思われる。日本に比べ本来文献資料が少ない上に、文化大革命によって徹底的に破壊・破棄されたからである。建築の世界においては、建築様式による年代判断もまったく不可能なことではない。しかし、それも絶対年代が明確な基準となる事例が要所にあり、それらを基準に様式を比較検討し、前後関係を判定するなどして、建築年代を絞り込んでゆく編年的手法によって始めて可能になるものである。そこで今回の調査では建築の細部意匠による編年を行い年代判定の規準を作ることを目論んだ。従来いわれている建築年代を再検証するために、基準となる基礎データを集めることにした。まず手はじめに、裏付けとなる根拠は示されていなくても絶対年代が伝えられている事例について、裏付け資料を確認することにした。今回の調査期間に調査した4件の事例を見ていこう。

水星廟 水星廟は、楓溪村の北より楓溪橋際に南面して建つ。北方を守護し水神・武神でもある真武神を祀り、真武廟とも称される。廿八都の南側にそびえる火山である香炉山に対峙して建てられたと伝えられる。『廿八都鎮

(1)『廿八都鎮誌』中国文史出版社、2007年1月